

大学4年生の風景 －女性の20代研究・その2－

工 藤 保 則

本稿は「女性の20代研究」の一環として、工藤（2005）に続き、「地方出身で都市の大学に進学した女子大学生」に対してのインタビューをまとめたものである。インタビューでは、主に、大学4年生の生活や今後の自分について語ってもらったが、それは必然的に、就職活動や仕事についてのことが中心になっている。
キーワード：若者と仕事、就職活動、大学4年生

1. はじめに

20代という時間は、それまでのものといろいろな意味で違ってくるように思われる。10歳前後までの「子ども」期は、生活の中で「(生まれた) 家族」が大きな位置を占めている。10代は、「子どもからおとなになっていく時期」ともいえ、そこでは「(生まれた) 家族」や「学校」が大きく関わってくる。それらに対し、20代は「おとな」になっているかどうかは別としても、それまでの「(生まれた) 家族」や「学校」からはなれて「社会」に入り、その中で定着をはかる時期といえる。

そういう20代は、「社会」と「個人」としての出来事が、それまでにないかたちで交わる時でもある。そして、地方出身で都会の大学に出てきたものは、そこに「都市」と「地方」の関係も重なってくる。また、女性は、この時期、それらの交わりや重なりについて、男性よりも多く意識し、20代というライフコースを送ることになる。

このことへの興味により、筆者は「地方出身の女性の20代」研究を始めることにした。その取りかかりとして、工藤（2005）では、地方出身で都会の大学に進学した女子大学生3人に大学3年のおわりの春休みにインタビューを行い、その内容をまとめている。そこでは、主に、小中高生時代のことについて（地元の環境を含む）、就職について、5年後・10年後の自分について、語ってもらった。そのインタビューからは、高校までがんばって勉強をし、大学では勉学、キャンパスライフともにがんばり、就職活動にもがんばって取り組もうとする、がんばることが得意な彼女たちの姿が見てとれた。

本稿は、その1年後、つまり4年生の最後の春休みに行ったインタビューをまとめたものである。卒業を前にして、大学4年生の生活について－必然的に、その中心は就職活動のことになった－、今後の自分について－これも必然的に、仕事と関係してのものとなった－、語ってもらった。

2. 若者と仕事

大学を卒業し働き始めるということは、大学生にとって大きな転換点である。大きな転換点で

あるが故に、働くということについて、否が応でも真剣に考えなければならなくなる。

これまで、働くことの意味については、熊沢（1997, 2000）、杉村（1990, 1997）など、労働経済学においてあつかわれることが多かった。最近でも、玄田（2001, 2005）などが注目されることが多いが、それは、これまでされてきた、仕事や働くこと一般についての研究というより、「若者と仕事」に焦点を合わせたものといえる。また、若者と仕事に関しては、小杉（2003）などフリーターやニートの問題が話題になることも多く、他にも、矢島・耳塚（2001）、本田（2005）など、社会学からも「若者と仕事」について、言及されることが多い。

また、最近では、仕事や働くことに関するインタビュー集も多く出版されている（B-ing 編（2004）、日経WOMAN 編（2005）など）。それらは、若者が「自分にあった仕事」「やりたい仕事」をみつける手がかりとして使われているのだろう。このように研究や出版が盛んにされるということは、とりもなおさず「仕事」が、現代の「若者」にとって、とても大きな問題となっていることのあらわれといえよう。

ところで、日頃、大学生と接していて強く感じるのは、就職や働くことに対する過剰な意識である。かれらは、大学に入学するとすぐに、いわゆるキャリア教育を通じて、就職のことを意識させられる。キャリア教育の場では、「即戦力」「資格」が強調され、そのためか、玄田も指摘するように「自分がやりたいことを、早めに、見つけなければならない」「早くやりたいことを見つけなければ充実した人生は送れない」というプレッシャーが今の若者には大きいのしかかっているように感じる（玄田2005:99）。また、その働くことへのプレッシャーに押しつぶされると、香山リカが事例を交えて紹介する「就職がこわい」状態に陥るようである（香山2004）。いずれにしろ、意識が過剰なのである。

意識過剰といわれたところで、やはり、大学4年生にとっては、「自分にあった仕事」「自分のやりたい仕事」に就くことが重要であることは間違いない。そして、それを実現させるために、熱心に就職活動をするのである。就職活動は、現代の大学生にとって、大学生活の中での、いや人生の中でも、かなり大きなライフイベントとなっているのである。

3. インタビュー調査から

ここでは、地方出身で都市の大学に進学した女子学生3人のインタビューを示す。インフォーマントは、工藤（2005）と同じ人物である¹⁾。それぞれ石川県小松市、福井県福井市、岐阜県岐阜市、出身であり、その土地で高校卒業まで過ごし、大学進学のために都市に出てきた。彼女らに対して、4年生の終わりの春休みに、個別にインタビューを行った。インタビューの内容は、主に、就職活動のこと、4年生の大学生活のこと、4年間の大学生活を振り返って、10代・（予想する）20代・30歳の時のこと、などである。なお、インフォーマントの氏名など固有名詞は一部、変更してある。

1) 広部理華（2005年3月11日インタビュー実施）

就職活動の流れ

わたしが「MRになる」って言っても、地元の子はあまりピンとこないみたいです。わたしも最初は食品とかわかりやすい企業に就職するつもりだったんですけど、友達のお姉ちゃんがMRをやっていて、「理華ちゃんに向いているかも」と言われて、そこからちょっと調べてみたら、「知識もついて、女の人も平等に働いていける職場があるんだ」と思ったんですよ。

製薬会社は動きが早かったので、就活は2月下旬から3月中旬が1番忙しかったです。その頃は、1日3社まわって、夜はエントリーシートを書いて、と就活漬けでした。なので、3月中旬を過ぎて絞り込まれてくると、逆に拍子抜けするような感じとともに、だんだんあせってきたりしていました。その頃、不安になって母に電話しました。「こんなんでいつ決まるのかな。どうしたらいいん」って話しました。母は「そのための教員免許や」と言っていました。そういう気持ちにはなれませんよね。

ちょうどその頃、3月末にマルイという皮膚の塗り薬を作っている製薬会社から内定が出て少しほっとしました。そこは皮膚に特化していたので、もう少し領域が広いほうがやれることが多いかなと思って、就活を続けることにしました。

4月、5月は、また、週に3社くらいをまわってました。その頃にまわっていたのが、科学製薬と大鳥薬品などです。製薬会社と言っても、それぞれの得意分野があって、大鳥はガンに特化していて、科学は整形外科でした。幸運にも両方から内定がもらえたんですが、そのどちらにすすらんかというのは、現代医療を取るか高齢化社会を取るかという選択のようでもあり、ずいぶん悩みました。でも、科学には大学の先輩がいて「すごくいい会社だ」と言っていたのと、抗ガン剤は営業が何もしなくても売れるらしいというのを聞いて、それなら「自分の力が試される方にしよう」と思い科学に行くことに決めました。科学で働いている人もいい人ばかりだったし、就活で受けに来ている人も似たような雰囲気の人が多かったのも、決めた理由の一ひとつです。

科学と大鳥だと、一般医薬品を出している大鳥は知名度があるので、両親も「大鳥にすれば」って言いましたが、大鳥は中塚製薬のグループ会社で規模もそんな大きいわけでもないし、株式も非公開で会社の中がよくわからなかったもので、科学にしたということもあります。

もちろん自分ひとりで決めたわけではなくて、両親には相談しました。悩みましたが、「将来どうなるか」とかあまり考えすぎると選べないと思ったので、とりあえずやりたいことができるかを考えて選んだらこうなりました。

就活で興味深かったこと

全体として、就活は人に影響を受けることなくがんばろうと思っていたので、精神的にがんばりました。教育専攻の子はがんばる子が多いんですよ。サークルの子と話すときズレがありますけどね。サークルの子は「一般職でいい。要領よく決めたい」って言っているんですね。でも、やる気がないから、それもなかなか決まらない。そんなズレがある中で、自分は自分でがんばろうと思って。あまりにちがう考え方だったから、そういう考え方もあるんだと割り切っていました。わたしはハートは熱いので、ラクな方には引きずられないんですよ。

就活をしていて、ほんとにいろいろな人がいて、会社もさまざまで、あったところに決まっていくなだなと思いました。みんなの内定先の話聞いていたら、そう感じます。自分に自信があって、チャレンジ精神が旺盛な子は、やっぱりそういうベンチャーなんかに行っているし。逆に商学部だったりすると、商学部もがんばっている子はいらなんでしょうけど、がんばってる方向性がちがうんでしょうね。ラクなほうに流されているように感じます。私は、教育専攻だったことで、がんばることに一貫性があったような気がします。

4年生の大学生活

教育実習は秋に出身の中学に行きました。わたしの時にいた先生はもうどなたもいなかったんですが、弟が去年卒業していて、先生に好かれていたみたいで、「あの子のお姉ちゃんなら」とよくしてもらいました。生徒が教室で見せる姿と、部活で見せる姿、色んな場面で、「みんなそ

れぞれがどこかで輝いているんやな」というのがすごくよくわかって、とても勉強になりました。それと「先生はこんなに生徒のことを考えて働いているんだ」ということにも、すごく感動しました。最近はいろんなニュースで、先生の不幸事が報道されて、そういう目で見られていることが気の毒になりました。

中学は優しい先生ばかりで、生徒の中にはそれをいいことに生意気ばかり言っている子がいたんです。でも、その子が泣くようなことがあって、そんなときに先生は大きな愛でその子を包んでいて、「このことを生徒はわかっているんかいな」と思いました。先生方はみんな、自分の生活を削って、生徒のためにやっていて、女の先生でも、家庭もあるのに9時ごろまで仕事があって、がんばっていました。そういう先生方の姿を見て、教職は魅力的だけど、自分が家庭を持ったときにここまでできるのかと思ってしまいました。先生は女の人にとって働きやすいとかいうけれど、実際はぜんぜん違いました。しんどいですよ。産休が取れるというだけです。

あと、校長先生が素敵でした。忘れられないのは、「問題を決して先延ばしにしない。親は子供に何かあった日には心配で眠れない。それを次の日に伸ばすというのは相談してくれた信頼関係を裏切ることになるから、絶対、どんな深夜であっても出向いて相談に乗る」と言われたことでした。だから、そこの中学は親と先生の関係がすごくよくて、たとえば以前は苦情も校長先生に直に来ることが多かったのが、担任の先生に言うてくるようになったそうです。

大学生活を振り返って

いままでもずっとそうなんですが、欲張りに活動してきたと思います。テニスサークルは時間の拘束も練習も厳しかったのに、バイトもして、就活、勉強、就活が終わったらまた、サークル活動もはじめて、勉強とバイトも両立させることができました。色んな活動に参加したら、自分にはその集団ごとに違う役割があるんですよ。テニスサークルと旅行サークル、それぞれで楽しむことができて、とても良かったです。大学生活はとても充実していました。

10代・20代・30代

10代はがんばる方向を間違えてました。ただがんばることがいいことだと思っていたんですよ。たとえば部活だと、陸上ですごくがんばっていたんですが、特に得意分野がなくて、まんべんなくやっていたんです。すると、どの面でもスペシャリストにも負けるという、すごくつらい状態でしたね。勉強についても同じだったように思います。

20代、とくに、来年は、働く場に慣れるのに精一杯だと思います。勤務地の希望は、実家のある石川と、そこと関西の間ということで、福井、滋賀で出そうと思っています。基本的にはどこでもいいんですけど、雪が降るようなところは嫌ですね。

仕事については、負けず嫌いなので、ノルマ以上にがんばっていると思います。あと、新しい知識が必要な職種だと思うので、常に勉強していると思います。春から半年間、千葉か横浜で研修があって、ゴールデン・ウィークに1回実地研修があります。それは「ふるさと研修」と言って、今まで自分が実際にかかったお医者さんへMRの先輩と一緒に回るらしいです。研修が終わって9月から配属地に飛んで、先輩について勉強しつつ、12月にMR認定試験を受けて、受かったら精力的に営業を行う予定です。

両親は「がんばってね」という感じです。80代半ばの祖母は助産婦さんなので、医療関係には詳しいんです。知り合いにも薬剤師さんとかいっぱいいて、なので、「あの会社はなんとかだから」といろいろ言ってくれます。だから両親よりもおばあちゃんのほうがわかってくれます。「大変や」とは言いますがね。おばあちゃんの時代のMRはプロパーと呼ばれていて、お医者さんへの接

待重視だったので、「カニとか持っていくんか」と言われて、「おばあちゃん・・・」ってなりました。おばあちゃんが勝手に手配してそうで怖いですね。

25歳は、当然、まだ働いていると思います。3、4年くらいで異動があるそうなので、そろそろ勤務地が変わる頃かもしれません。まだ同じ勤務地だったら、リーダーっぽくなってみんなを引っ張っていると思います。

30歳はそろそろ結婚していたいんですが、MRは女性を採用し始めた歴史が浅いので、結婚して続けている人が、まだほとんどいないんですよ。MRが無理でも、内勤にまわったりして働き続けたいと思っています。MRは引き抜きがあつたりして、会社の移動が多いんですけど、できればわたしは同じ会社で続けたいと思います。

2) 青木理恵 (2005年3月11日インタビュー実施)

就職活動の流れ

就活は2月くらいに大学でのセミナーに参加したのがスタートでした。3月くらいから会社の説明会に参加し始めて、最初はプライダル関係を中心に活動していました。人と接する仕事がいいと思ったので、5社くらいプライダルを選んで、大阪のプライダル会社3つと、京都1つ、地元の福井でも1つ受けました。そしたら、希望者の女の子の数の多さにびっくりして、自信をなくしました。他の子の話を聞いていると、プライダルを目指している子はかなり思い入れがある子も多くて、そういう子は東京にも受けに行ったりしていたんです。それを知って、「わたしはそれほどでもないなあ」と思いはじめてしまって。実際、説明会から選考に進んだ会社は京都の高見という会社と、名前を忘れてしまったんですけど大阪の南港にある会社、福井の会社です。他には保険会社。これは女の人が働きやすいとか、採用が多いということで軽い気持ちで受けました。あと、介護系の会社の総合職にも行きました。

でも、ずっと自分で何がしたいかというのが定まらなくて苦しみました。説明会には行っただけで、選考にまで行く気になった会社はそんなになかったんです。大学の4年間で考えてきていたつもりだったのに、福井で就職するべきなのかどうかと働く場所にも悩んだし、何をすることも決められなかった。全国転勤がいやだったので、途中から一般職も考えたんですが、長く続けられなくてすぐにやめてしまうというのも嫌だったんです。一定のところで長く勤めたいというのがあったので、できれば関西にしか支店がない会社があればいいなと思っていたんですが、そういうところはなかなかないですよ。

エントリーしつつ、会社を調べて、そういう私の中での条件で絞っていくうちに受けるところがなくなって、4月は知らない間に過ぎていきました。大阪の介護系の会社には4月の終わりから説明会に行き始めたんですけど、なんかうさんくさかったんです。お金儲けとホスピタリティのバランスがうまくとれていなくて、ここも選考までは行く気になれませんでした。

そういうときに、たまたま保険会社のセミナーでゼミの子と会って、その子が「介護職につきたい」と言っていたんです。わたしも「ヘルパーの資格はすぐ取れるけど、もう少し高度な資格が取れるといいなあ」という話をして盛り上がりました。それで、社会福祉士を考えたのですが、社会福祉士は福祉系の学部に入ったら卒業と同時にもらえるような資格で、そんなに需要がないということを知りました。資格をとることを考えながら、それでも就活をやめるわけにもいかず、すごく悩んでいました。精神的にかなり追い詰められて、モノを投げたり、暴れたりしました。人に相談しても結局「何がしたいのか」ということを聞かれるだけだし。お兄ちゃんが京都に来

たときにも相談したのですが、「何がやりたいかを考えることだ」と言われてしまいました。

5月半ばごろまでそんな状態が続いて、母がすごく心配して、京都に顔を見に来てくれたんですよ。就活の話を喫茶店でしました。そのときに社会福祉士や理学療法士などの資格の話をして、「理学療法士の資格を取ることを躊躇しているのはなぜなの」と聞かれました。わたしが「そのためには専門学校に3年間行かねばならないので、時間的なことや経済的なことをいろいろ考えてしまう」という話をしたら、母には「そういうことを考える前に、いまのふらふらしているあなたを見ているほうが親は不安だよ。お金のことは置いておいて、何がしたいかを考えて」と言われました。また、私が「働かずに25歳になってしまって、みんなに置いていかれる感じが不安」と言ったら、「3年くらいあつという間に過ぎるよ」と言われて、やっと、「それでもいいのかな、進学しようかな」と思えました。

それで、大阪の医療専門学校の説明会に出かけて、そこの在校生に話を聞く機会を持ちました。それがすごく良かったんです。何人か話を聞いたうちの1人は28歳の男性で、インテリア関係の仕事をやめて、学校に通い始めた人で、「もっと人と深く関わって、人を助けられる仕事をしたい」と思ったそうです。わたしは「28歳で仕事をやめて、収入もなく、勉強をしている人もいるんだ」と思えたり、理学療法士の仕事も病気や怪我でリハビリが必要になった人が、回復するまで支えていくというのは、人を救うというほどではないですけど、「人の助けになれる仕事でいいな」と思えました。ただし、すごくハードな仕事らしいんですが、わたしは動いていたほうがいいタイプなので、「向いているかもしれない」と考えました。

実際に理学療法士の募集はどの程度あるのか求人調べてみると、いまはこの病院でも随時募集していて、需要は多いようでした。わたしが卒業する3年後には需要と供給がとんとんになるらしいんですが、それでもまだ求人はあるみたいです。自分の将来を考えたときに父の形成外科医という仕事は影響していたと思います。父は家では何もしない人なんですけど、患者さんからは慕われているらしくて、そういう仕事も素敵だなと思ったのも大きな影響のひとつでした。それで5月末にはすべての就活をやめて、「これでいこう」と決めました。

1人暮らしにはお金がかかるので福井の専門学校に行くことにしました。彼氏はアメリカの大学院に2年行くことになっているので、大阪の専門学校だろうが、福井の専門学校だろうが、遠距離には変わりがないです。福井の専門学校の試験は、10月に社会人入試があつて、12月のはじめにまた特別入試があり、1月、2月に普通の入試がありました。社会人入試は試験がなく、面接と論文だけなんですけど、3年以上の勤務経験がないと受けられないので、わたしは特別入試を受けて合格しました。

就活を終えて

就活は苦しかったですね。「自分は何がしたいか」というのと、「自分には何ができるか」ということで悩んで、試験に落ちたり、友達と比べたり、自己否定感が大きかったです。いまはぜんぜん気にしていないんですが、普通のコースから外れるということも、就活の時期は悩みました。それを後で振り返って、「すごく弱いなあ」って自己嫌悪でした。

わたしの中に、最初、就活をせずに専門学校に行くという選択肢がなかったのは、「もしかしたらもっといい道があるかもしれない」という気持ちがあつたからです。それと、「働かなくていいのか」という迷いがあつたから。みんなが就活をしているのに何もやらないのは不安だったというのもあるし。いま思えば、その過程も必要だったと思います。よい会社に巡り会っていたら、就職していたかもしれません。就活で会った介護職につきたいと言っていたゼミの友達の

影響も大きかったです。一緒に鳥丸にある福祉の仕事の紹介所に行って、ボランティアや体験で働けるところがないか探しました。そういうことを一緒に目指している人がいるというのは心強かったです。

4回生の大学生活

卒論は無事に何とか終わりました。4年は週4日くらい大学に行っていたんですが、そんな忙しくもなく、南青少年活動センターにも行きはじめました。卒論は最後慌ただしく書いたので、ちょっと心残りなんですけど、とりあえずは出せました。

大学生活を振り返って

大学4年間はいまから思えば、京都は本当に良かったなって思います。途中は嫌になったときもあるんですが、いまとなつては夢のような4年間でしたね。授業も楽しく受けられたし、自分なりにがんばってこれたし、良い思い出がいっぱいです。それと、ボランティア活動がすごく大きかったです。南青少年活動センターでのことは大きな糧ですね。このあいだお別れ会をしてくれて、みんな泣いてくれて、必要とされている自分の存在を感じられて、すごく充実していた時間だったと思います。

10代・20代・30代

10代の自分はまとめ役とか、世話役をずっとやってきたなという感じで、人の世話を焼くのが好きだったんだなと思います。

20代は、これまでは何事も流れに身を任せてきたような気がします。

4月からは高校の頃のように朝から晩まで学校に通って、かなりの量の暗記をこなさなければならぬようなので、勉強しているだろうと思います。3年目は実習が多くなるらしいので、そこで自分のやれることを見極めて、福井で就職先を探して、数年はそこで働くことになると思います。

25歳にはようやく働き始めて一生懸命やっているといます。また就活があっても心配していないのは、面接の5分10分で決められるわけではなく、実習で自分を見せられる時期がある程度あるからです。だから、きっとやれるだろうと思います。

福井はたまに帰るといいんですけど、天気もどんよりしているので、これから暮らすとなるとつまらないと思うかもしれないですね。京都の娯楽の充実具合とは比べものにならないですから。

30歳は、数ヶ月前までは、3年間くらい働いてから結婚したいと思っていました。でも最近では専門学校を出て1年くらいで結婚してもいいと思うようになりました。それは南青少年活動センターで働いていて、このあいだ結婚した院生の臨時職員の方と話していて思ったことです。その人は4月から大阪の高槻にある児童自立施設で、夫婦でしかできない親代わりの役目を担って、働くことになったそうなんです。その人と「結婚式にどれくらいお金がかかるか」というような話をしていたら、「お金はそれほどなくても、ご祝儀でとんとんになる」と言われて、「お金貯めてから結婚してと考えなくてもいいんだ」と思ったんです。いまの彼と結婚するなら、4年間付き合っているので、「30歳まで引き伸ばさなくてもいいか」と思っています。

3) 宮腰英里 (2005年2月22日インタビュー実施)

就職活動の流れ

就活は去年の11月からはじめました。最初、就職説明会があって、行ってみたら、参加している子はみんなが真剣で、いつもは適当にしているような子でも目の色が変わっていたので、「こ

んなに真剣にならないとできないものやったら、やらなきゃならないんだなあ」と思いました。そして、とりあえず知っている大手企業、テレビ局から広告、化粧品メーカー、銀行、業界を選ばずにエントリーをしはじめました。

その頃は就活が納得いかなかったら、大学院に行くか、教員になるって決めていました。だから、そんな逃げ道があって就職するのなら、世間の目も含めて、自分自身が満足できるようなところじゃないと嫌だと思っていたんです。とにかく誰にも負けたくなかった。わたしは1つの会社でずっと勤めようという気はさらさらなくて、どんどんキャリアアップしていきたくったので、1番最初に入った会社が自分に力をつけてくれるようなところでないと思嫌でした。しかも、5月末に教育実習に行くことになっていたんで、それまでに結果を出さないといけませんでした。だから、5月中旬のエントリーは全部やめました。結果的に中小企業がはじまるのはその頃だったので、受けたのは大企業に集中してしまいました。しかも一般職は嫌で、それくらいなら教職か大学院に進学しようと思っていた。3月中ごろに公文から内定をもらって、4月のおわりに携帯電話会社のイツモ東海から内定をもらって、同じ頃にエイチアール・マーケティングというところからももらいました。

エイチアール・マーケティングとイツモ東海はがんばれそうなところは一緒だったのですが、体質がまったく違う会社だったので悩みました。片や元国営企業、もう一方はベンチャーマインドいっぱい企業。面接でもエイチアール・マーケティングは初任給が30数万円で、「その代わり飛び込み営業もあるよ。知らない会社に入っていって、名刺を何枚もらってくるかが勝負。そんなことできる」って聞かれました。わたしはその頃「自分はできる、自分はやれる」と自己暗示をかけていたところもあって、乗り切れました。

就活の場って、自分をPRする場なんですけど、自分をつくっていく場でもあって、「じゃあそれが本当のあなたなの」って言われたら、そうじゃないような気もします。自分に弱い面と強い面があるとしたら、会社に弱い面なんて見せてもしょうがないから、強い面だけを見せますよね。エイチアール・マーケティングは、私の中のその強い面やハングリーなところ、負けず嫌いなところを買ってくれて、「あなたならできる」って言ってくれたんです。でも、実際のわたしは、そういう部分ばかりじゃないので迷いました。

いろんな人に相談したんですよ。親はもちろんのこと、祖父母にも話したし、企業で働いているおじさんとか、友達とか。最終的には自分で、自分が120パーセント出し切ってしかやっていけない会社よりは、80パーセントや90パーセントの力を出し続けられる会社のほうが良いなと思って、イツモに決めました。イツモは、仲間とともに成長していけそうな雰囲気のある環境なので、がんばれそうだなと思っています。

でも内定者用の課題をやりながら、「わたしはホンマにこんなことをやりたいために、この会社を選んだんだなあ」と思うときも多々あるんですよ。でも、会社って、そんなもんなんじゃないかなって。たぶんやっていること自体がおもしろいとか、好きだとか思ってやっている人なんて、世の中にはすごく少なく、好きじゃないけどやっている人だってたくさんいる。だからこそ持てる視点があたり、身につけられるものがあたりするわけですよ。仕事は手段であって、目的じゃないような気がします。うちの会社は、営業も企画も人事も色んなことをさせてくれる。だから、色んな視点から力をつけて、「自分がトータルで成長できそうやな」と思ったら、「いい会社だな」と思えるような、思い込まされているような、そんな感じです。

就活で興味深かったこと

就活やっていて、興味深かったのは、たとえばただ建っているビル1つとっても、そこには不動産会社関わっていて、建設会社関わっていて、そしてその会社で働いている人がいて、そんな世の中の仕組み全体を意識することができるようになったことです。広告を見ても、それを誰が作っているかなんて全く興味がなかったのに、そういうことが気になったりだとか、視点が変わったところですね。視野がとても広がった気がします。もう1つは自分を語ることで、自分というものをもう1度振り返ることができた。いままで「自分はどんな生き方をしてきたのか」ということを他人から聞かれなければ話す機会もなかった。でも、しゃべり、振り返ることで、たとえそのことを否定されても、自分自身では確認することができたことが楽しかったです。

しんどかったのは、誰も口に出しては言わないけど、女に対する扱いの低さです。2次選考までの男女比率は変わらないんですよ。でも3次選考になるとがくと女性の数が減っている。そして最終的に自分が落ちて、内定者に「どんな女の子が内定しているの」って聞くと、「5ヶ国語しゃべれる帰国子女」とかなんですよ。それは自分の力がなかったからかもしれないし、まわりの女の子に力がなかったからかもしれないけれど、男女ともに同じ力があるとするならば、会社は男をとるんじゃないかなと。そこには「男の人はよく働けて、女の人はよく働けない」という世間の目があるんじゃないかと感じるがありました。

あと、同じ専攻や学科の子を見ていても、男の子はいわゆる大手に決まっている子が多いんです。でも女の子は途中であきらめている子もいる。「わたし派遣に行くわ」とかね。圧倒的に総合職が少ないんです。それはその子自身の選択なのかもしれないけど、なぜかそうになってしまう。それは社会のせいだけではないんでしょうけど、そんなものなのかなあって。男の子としゃべっていて「女はいいよ、総合職か一般職か、他にも派遣、家事手伝いなんかも選べるんだから。男は選べない」と言われて、そういう選択の幅が広いと言えばそうですが、本当にそれは選択なのか。これまでは男女平等に扱われてきたけれど、社会に出るのってやっぱり違うのかなというふうに感じました。

働くということ

いままで仕事がすべてという感じだったですけど、いまは目的が仕事ではなくて、仕事を手段に使いたいなと思っています。仕事を通じて勉強していけたらいいし、自分に投資し続けたいという気持ちがあるんです。もちろん、会社では会社の仕事を全力でがんばるし、やっていこうと思っているんですが、会社がダメになったからって、自分もダメになるんじゃないくて、いまの会社から他に飛び出すとしても、そこから何かをもぎ取ってステップアップしていくための手段にしたいという意識があります。

「働くことは楽しくて、充実感があって」というような夢はいまは抱いていなくて、そのこと自体が楽しいというような「安い楽しさ」じゃなくて、長いスパンで見たときに、「わたしはこういうことで成長した」というような自分に対する満足感が持てるのが、働くことじゃないかなと思っています。小学校や中学校のように「バスケットして楽しい」とかそういう喜びじゃなく、過程は苦しくても結果的には満足感があって、しかもお金が得られるというプラスアルファも大きいですね。それに、働いて、自分のお金で、自分で何でも決めてできるということが、本当に親から自立できるようでうれしいです。

4回生の大学生活

この1年はとても早かったです。就活が終わって、教育実習が終わって、気がついたら後期が終わっていて、京都を去る。

就職が決まってからの大学生活は、ホント何してたんでしょうね。とにかくストレスがたまっていたので、自分のしたいことをしました。授業があったので、その間にできることは限られていたんですが、京都の寺院とかをめぐっていました。前から好きなことだったんですが、就活で途切れていたもので、それを再開したんです。そのことで日々が過ぎていって、「京都の街に対する執着がいまになって出てくるなんて」というくらい、愛着が芽生えてきましたね。

そして、何が忙しかったかって、卒論です。わたしは9月の最初のゼミで1万字提出という課題があったので、夏休みもそれに没頭していて、9、10、11、12月なんて言うまでもなく、卒論の分析で図書館にずっとこもっていたんですよ。「あれ、夏休みなのに、わたし週5日間くらい登校しているな」みたいな状態で、10月くらいになると図書館も混みだしたんですけど、図書館とパソコン室の往復で、とにかく悔いのないものを残したかった。4年間の集大成なのに、「何だこれは」というものを作りたくなかったんです。文章の時点で2万7千字くらいになってしまったので、そこから2万字まで減らす推敲が大変でした。書きあがったときはうれしかったですね。読み返しすぎて、諮問の前には「もう読みたくない」ってなっていました。

大学生活を振り返って

大学生活は、うまくは表現できないんですけど、小さい箱から大きな箱に飛び出す過程だったのかなという気がします。わたしは地元から出てきたから、地域の変化がまずあったじゃないですか。こういう地域もあるんだ、こういう文化もあるんだという発見。しかも、それだけじゃなくて、いままでは親にずっと養われてきたのに、自立していく道を探していき、かつ1番可能性が持てるときでした。小中高生のころは、「大学生になったらすべてが決まる」と思っていたわけですが、でも、わたしのまわりにはもう1回大学に入りなおす子もいて、医学部に行って医師を目指したり、会計士を目指して勉強しなおしたりする子もいるし、留学する子もいて、したいという気持ちを持つことが大事で、「いつでも遅いなんてことはないんだな」ということを気づかせてくれる時期でした。いままでは自分のことでいっぱいいっぱい、たかが受験で悩んでいた。でも大学生活はいろんな意味で視野が広がるし、可能性も広がる時期ですよ。わたしは京都の土地で、この大学で勉強ができて本当に良かったと思っています。第一印象は悪かったけど、愛学精神がわいてきました。あれもやっておけばよかったって後悔することもあるんですけど、自分としてはこれが限界だったなと思います。

10代・20代・30代

10代の頃は、目先のことしか見えなくて、それも次の模試とか、今から思えばどうでもいいことなんですよ。高校の時も、将来の夢を書かされたりもするし、「将来を見据えた進路選択」と言われましたけど、結局、そんなに夢を見据える力というのは高校時代では持てませんでしたね。夢を見据えるというのは、日常的に教科の勉強をしているからと言って得られるものではなくて、色んな人と話したり、色んな人と接することで、「こうなんじゃないかな」と見えてくるもので、ひょっとしたらいまでもさても悩んでいて、迷っていて、変化していくものなのに、高校時代なんてそんなことができるはずもなかった。もちろん、考えることは大事なんですけど、明確な夢なんて持つことは難しいんじゃないかなと思います。だから、夢を見出すためにわけもわからず努力していた時代だったと思うんですよ。

高校に入ったらすぐに大学受験のことを意識させられて、たとえば「模試の結果が前回より下がった」だの、「前回の模試では他校に勝っていた成績が、今回はうちの高校が負けている」だの、自分のせいじゃないのに、常に比較されて競わされて、そんな環境にあせらされて、本当にあれは、なんだったんでしょうね。しかもわたしの場合は親も教師で、親戚も医者だったり、先生と呼ばれる職業の人が多くて、選択肢が少なかったから、余計ただやみくもにやるしかなかったんですよね。大学入学時にカルチャーショックを受けたのも、ただまじめにやっていくことがだけ前提だった自分のキャパの少なさだった気がします。

20代は、少しずつまわりが見えてきて、目指す自分になるための助走期間のように思います。まだ現実を知らないですからね。まだまだ勉強して、今の自分が想像していないようなこともできるようになるかも、と思ったりしますし、夢が見られるときなのかなと思います。そういうことをいうお、親には甘いといわれますけど。

25歳の自分はまだ3年先なので、会社の中でやりたいことをやっと思出せる時期だと思うんですよ。会社の中でやりたいことを見出して、実現していこうとしつつ、会社に出す書類の「将来の夢」の欄にも書いたんですけど、「研究者兼ビジネスパーソン」というものを見据えた状態でいたい。満足しつつ、ちょっとの物足りなさがわたしの原動力だと思っているので、その物足りなさを補強しつつ、資格を取ったり、何か勉強したりしている時期だと思います。

私の中での30歳像には3パターンあって、1つ目は転職していて、もっと自分がやりたい仕事をしている。もう1つは、仕事をやめて、勉強しなおすために大学院に行っている。3つ目は入った会社でまだやりたいことが残っていて、そのことをやりつつ結婚している。最初の2パターンも結婚している可能性はあるんですけど、会社に残っているほうが結婚している可能性は高いかなと思います。仕事をやめているようなことはないかな。専業主婦になっていることはないです。と言い切っておいて、専業主婦になっていたらおもしろいんですけどね。

4. おわりに

インフォーマントの学生3人は、大学での専攻は同じであるが、進路はそれぞれ全く違っている。3人のうちふたりは、Uターン進学、Uターン就職（厳密には県は違うが自宅から通うということではUターンといえよう）と出身地（出身地域）に戻り、ひとり出身地勤務の希望は出したが勤務地はまだ決まっていない。この3人の進路選択においては、「地方出身」（で都会の大学に進学）ということが、なにかしらの影響を与えているように感じられる。また、その進路選択も、深く考えているようで、一方で、ある意味、偶然性によるところもうかがえ、興味深い。

今後は、このインタビューデータを用いながら、教育と社会の結び目・結び方である、ライフイベントとしての就職活動について、機会をあらためてくわしく考察したいと考えている。

注

- 1) インフォーマントのプロフィールや大学入学までのこと、大学入学後のことなどについては、工藤(2005)を参照してほしい。

参考文献

B-ing編集部、『プロ論』徳間書店、2004

- 玄田有史,『仕事のなかの曖昧な不安』中央公論新社, 2001
———,『働く過剰』NTT出版, 2005
本田由紀,『若者と仕事』東京大学出版, 2005
香山リカ,『就職がこわい』講談社, 2004
小杉礼子,『フリーターという生き方』勁草書房, 2003
工藤保則,『『女性の20代』研究序説』『仁愛大学研究紀要』(3), 2005
熊沢 誠,『能力主義と企業社会』岩波書店, 1997
———,『女性労働と企業社会』岩波書店, 2000
日経WOMAN編,『妹たちへ』日本経済新聞社, 2005
杉村芳美,『脱近代の労働観』ミネルヴァ書房, 1990
———,『「良い仕事」の思想』中央公論新社, 1997
矢島正見・耳塚寛明編,『変わる若者と職業世界』学文社, 2001

付記 本稿は,「平成17年度仁愛大学共同研究」の研究成果の一部である.